あの日を感じて

長久手中学校二年　山口　天羽

七十三年前の八月六日、八時十五分、広島県に原子爆弾が投下されました。原爆の威力はものすごく、三〇〇〇から四〇〇〇度の熱風が人々を襲いひどいやけどを負わせました。人々の皮膚は、はがれ落ちて垂れ下がり、骨が見える、そんな姿にまでなってしまいました。

今回の広島平和体験学習では、被爆者の方の話を聞く事が出来ました。その話の中で、私が一番印象に残った事は、『原爆の光や熱線、放射線を浴びた人たちが、うでの皮膚がはがれた状態で幽霊のようなポーズをして、それをぶらさげながら水を求め川に向かって歩いていた。』という話です。今では、想像もつかないぐらい怖い事が七十三年前に起こったんだと改めて感じた一言でした。

一日目に行った広島平和記念資料館では、パネルや写真、映像を見て、アメリカが日本

20 × 20

にしようとしていた事、死傷者数や被爆者の数を知る事が出来ました。映像では、原爆の投下された瞬間やキノコ雲があがる様子などを見て、すごい被害が出たという事を実感しました。

二日目に行った広島平和記念公園では、原爆ドーム、原爆供養塔に行きました。原爆ドームは、崩れ落ちた建物の一部が散らばっていて、ものすごく悲惨な光景でした。近くには、多くの人が飛び込んだ川があり、何万人もの人が流れる所を想像すると、とても怖く原爆の恐ろしさを体感しました。供養塔では、私たちがおった千羽鶴を贈呈し、亡くなった方を思い、鐘を鳴らして来ました。

二日間、広島を見学している中で何人かの外国人に声をかけられました。海外から、原爆を学びに来る人たちもいるので、私たちのような、原爆の悲惨さを学び、受け継いでいる人が、外国にもその歴史を伝えていかなければならないと、思いました。

20 × 20